



るのか、という課題を自らの生き方、そして社会問題に応用した人であったと言えるのではないだろうか。本稿では、

## 研究の現場から

道徳科学研究センターの研究動向

### 正しさと優しさの調和に向けて

モラロジを学習されている皆様におなじみの「正義と慈悲」という言葉があります。これは簡単に言い換えれば、「正しさと優しさ」ということとす。モラロジ研究所の創立者・廣池千九郎（二八六六―一九三八）は、正しさと優しさの調和をいかにして図

## 正しさと優しさをいかに

## 調和させるか？——正義と慈悲の研究

道徳科学研究センター人間学研究室 研究員

竹中 信介

廣池自身の研究と体験を紹介したあと、事態の切迫する現代の諸問題に對して、正しさと優しさの調和という視点から切り込む重要性を述べたいと思います。

### 廣池千九郎の正義と慈悲

廣池は、大正元年（一九一二）に東洋法制史の研究で法学博士の学位を得しました。その一連の研究のなかで主として掴みとったものが、東洋と西洋の法律に一貫して見られる「正義」という物事の判断基準でした。一方の「慈悲」についてはいかがでしょうか。廣池は、日本皇室の研究を進めるなかで、天照大神の精神に慈悲の源を発見することになりました。これに加えて、廣池自身の身体上・

精神上の体験も注目されます。明治四十二年（一九〇九）頃から、それまでの積年の苦学が健康を害し神経衰弱に陥りました。そのことが一つの動機となり、心を宗教に向けることにより、結果として慈悲心を体得することになったのです。

このように、正義と慈悲はそれぞれ異なる文脈を背景に浮上してきたのですが、廣池自身は生涯、一貫して正義と慈悲の調和を念頭に行動しました。そして、この問題は最終的には後進に託されることになったのです。例えば、現在のモラロジ研究所が発行している改訂『テキストモラロジ』概論（二〇一五年）の第二部第六章は、「正義と慈悲」で構成されており、廣池からのメッセージが

現代まで届いている良い例だとと言えるでしょう。

### 現代の諸問題に切り込む

現代社会ではさまざまな場面で、正義と慈悲の調和のあり方が問われています。身近な人間関係や地域社会でのトラブル、会社組織での振る舞い方、国際社会での自国の立ち位置、そして地球環境問題に至るまで、「正しさ」だけでも、あるいは「優しさ」だけでも立ちゆかない課題が山積しているように思われます。各々の場面で、正しさと優しさの調和をいかに図るのか、という視点が効果的であり、一つひとつの事柄を具体的に考え善処していくことで、希望ある未来を切り拓いていけるのではないのでしょうか。

本稿についての詳しい内容は、『モラロジ』研究』第八十三号（二〇一九年八月）に掲載の拙稿「廣池千九郎における正義と慈悲Ⅰ——先行研究の整理と評価／正義と慈悲総論①」をご覧いただければ幸いです。読者の皆様からコメントをいただけることを楽しみにしております。